A Study on Rohan Kōda's Poetry *Kokoro-no-Ato...Part 1*

露伴〈心のあと〉考（前）

日沼滉治

一　はじめに

この小論は、幸田露伴の詩を概観しようとする。その長篇詩『心のあと　出廬』[1]（明38・1・1、春陽堂）は、長篇小説『天うつ浪』の休載に替えて、詩集「心のあと」全巻の序として『読売新聞』に連載されたものである。出版され注釈書まで出たあと創作は沙汰やみとなり、そのごの露伴は小説と詩の双方に黙してしまった。しかし、みずから「心のあと」と呼んだ詩業は断続しながらも生涯にわたり、音韻に寄せる関心は新体詩草分けのころから最晩年に及んだ。その文学世界は、風流、魔王、閉居、出廬、幻境などの問題をはらみ、新体詩歌史および北村透谷の文学世界にかかわるものがある。そこで小論は次の順序をたどろうとする。

心のあと、新体の詩歌、風流悟—魔王、出廬、幻境—我牢獄、音幻

二　心のあと

露伴の文壇登場作は、小説『露団々』である。しかし、それが明治二二年二月一七日『都の花』（～明22・8・4、金港堂）に発表されるに先立ってその年の一月、「賤機帯（しずはた）」（『君子と淑女』明22・1・1）および「音と詞」（同、明22・1・1～2・1）が露伴迂人の名で発表された。前者は「杵屋三郎介述、露伴迂人妄評」とされ、後者はのち表題を「作詩者と作曲者との地位の対等なるべきことを訴ふるの文」と改め、随筆集『讕言』（明34・9・18、春陽堂）に収められた。いずれも詩歌・音曲に関する発言であり、小説家露伴と並行して早々に詩人露伴、少なくとも詩論家露伴が姿をみせていたのである。後者「音と詞」には、こうある。

今日単に西曲を聞きて是れに我邦語の詞を附するは随分困難なるべく、加るに東西人情の差異もあれば、原曲と新詞との調和を成就する迄には実に困難なるべしと考へらるゝなり。

西洋音階と日本語、東西人情の差異、見通しのきびしさ。これらの指摘がその場かぎりの時論であったのかどうかが問題である。いちはやく新体詩草創のころに露伴は、詠む歌でなくて唱う歌、音声としての形式、詩の内容としての人情を思い、成就までの困難を覚悟していたのだろうか。新体の詩歌について、露伴の創作と発言とを年譜風に整理してみよう。

参考にしたのはつぎの資料である。

谷沢永一・肥田晧三・浦西和彦編『露伴全集　別巻下』（昭55・3・28、岩波書店）

昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書　第六十一巻』「幸田露伴」（昭63・10・5）

三浦仁編『日本近代詩作品年表　明治篇』（昭59・2・25、秋山書店）

三浦仁編『日本近代詩作品年表　大正篇』（昭60・2・28、秋山書店）
三浦仁編『日本近代詩作品年表　明治篇』（昭61・2・28、秋山書店）

ただし、新体詩歌および音曲・音声をも含めた露伴の作品をあげ、二字分さげて作品評や時評や談話・感想、それに『心のあと　出廬』にかかわる『天うつ浪』中断前後の事項を示した。

賤機帯	明22・1・1	『君子と淑女』杵屋三郎介・露伴迂人〈妄評〉
音と詞（明34・9・18『讕言』に改題収載「作詩者と作曲者との地位の対等なるべきことを訴ふるの文」）	22・1	『君子と淑女』
〃	・2	〃
露団々の歌	・3・17、4・21、6・16	小説「露団々」第六回・第十一回・第十六回の作中詩
雪紛々の歌	・11・25	小説「露団々」第十六回の作中詩
無題	・8	『読売新聞』中西梅花との脚韻応答詩
述懐	・10・11	『読売新聞』　〃　（蝸牛露伴）
おふみ様を弔ふ	・11・13	『読売新聞』（幸田露伴）
請教放語	・12・25	『志がらみ草紙』
風流問	22	（推定）

竹馬・病後の作　23・2・21　『読売新聞』（筆名、把月庵、「病後の作」はのち「春昼病後」と改題）

土筆　・3・22　『読売新聞』（筆名、把月庵）

俚歌木蘭花　・4・11　『江湖新聞』

琴唄風前虹　・4・8　『読売新聞』「日ぐらし物語」の作中詩

無言非無意　・7・21　『読売新聞』「雑詠」（筆名、つゆとも）

露　・7・14　遅塚金太郎宛書簡

井上通泰子よ　・8・25　『志がらみ草紙』

あまのじやく　25・1・28　『国会』（筆名、七升鬼）

即興　・7・30　『国会』紀行「易心後語」其十

宝の蔵の歌　・7　少年文学『宝の蔵』第二・第四・第五・第六・第七・第十四の作中詩

うすらひの歌　26・3・12　小説「風流微塵蔵」中、「うすらひ」其二十四の作中詩

現存せる童謡　・6・30　『国会』

〃　・7・1　〃

新浦島の歌　28・1　小説「新浦島」其五の作中詩

藤・僧の恋　・2・5　『太陽』（脱天と署名）

新躰詩に付て	29・6	『文学界』6月号（編者に寄せたる書簡、明・34・9・18『讕言』に改題収載「某に与へて新躰使の応に起るべく且つ須らく起すべきを説くの書」）
新躰詩	・8・15	『新小説』「時報」（無署名、推定）
〃	～12・15	〃
文人の自ら保つべき態度	・9・15	〃　「讕言長語」
敢て苦吟せんかな	・9・15	〃　〃
撈蝦児の歌	・12	小説「ひげ男」其十二の作中詩
おろかなる烏の歌	30・4	『小国民』9年8号『新小説』（改題「初日の出」）「露伴夜話」第一「おろかなる烏」の作中詩（明39・12『釣遊秘訣　釣師気質』に「撈蝦児の舞歌」と改題転載）
題初日の出	33・1	
戯評長唄文句　新撰いろはがるた	・4・10	『読売新聞』
落花塚	35・4	国府犀東『花藍集』題詩を改作（幸田家蔵）
天うつ浪（一）	36・9・21	『読売新聞』
〃　～（百）	～37・2・10	〃

心のあと　はしがき　・3・13　〃（大4・7「心之足止緒言」と改題、『大正名著文庫第十六編　悦楽』以下に所収）

心のあと　出廬　・15　〃

〃　〜12・31　〃

斎藤緑雨君を弔す　・4・16　『新小説』5月号

出廬正誤　・7　『読売新聞』

出廬正誤　・13　『読売新聞』

〃　・9・17　〃

心のあと　野口米氏に寄す　・9・17　〃

〃　〜18　〃

出廬正誤　・9・20　〃

社告　小説天うつ浪に就いて　・20　〃

〃　〜21　〃

天うつ浪（百一）　・11・26　〃

〃〜（百五十七）　〜38・5・31　〃

初版引　1・1　（『心のあと　出廬』初版序）

近作一篇　・5　『新古文林』（創刊号）

七碗歌	1・1	『文芸界』
『心のあと　出廬』	1・1	春陽堂
那須野	1・1	
近作一篇	5・1	『新古文林』（創刊号）
再版引	・	（『心のあと　出廬』再版序）
短詩評	9・1	『読売新聞』
〃	〃 30	〃
〃	10・2	〃
〃	〃 12・24	〃
短詩につきて	12・1	『文芸界』
〃	12・14	『読売新聞』
短詩（評）	〃 16	〃
〃	39・1・1	〃
二つ鏡	〃 3・22	〃
日出	1・1	『時代思潮』
四行詩の意見	1・2・1	『ホノホ』
		『新声』

短詩（評）　・3・1　『文芸界』
短詩　・5・15　『探検世界』
歌三章　・5・15　〃
落花　・5・25　『ホノホ』
羽抜鳥　・5　『探検世界』（創刊号）「歌三章」の内
〈即興六章〉春の品川湾（未明・日出）・夜〈秋の利根川（一～四）〉
・6・1　『東亜之光』
下町歩夜釣　・9・3（？　斎藤八郎宛書簡参照、幸田家蔵）
新利根川辺　・12　『釣遊秘訣　釣師気質』の題詩か（昭25・4『心』に「釣二題」の一篇として発表）
新体詩に付て（感想）　・6・30　『文学界』（脱天と署名）
〈漫吟〉あわびの珠・しやぼん珠・水精の玉　・8・1　『東亜之光』（『暁靄集』再録）
〈漫吟〉夏草・五月雨　・9・1　〃
爪　・11・1　『心の花』
手函の絵　42・5　東京音楽学校『中等唱歌』（目賀田万世吉作曲）
函根　44・5　『日の出公論』（創刊号）

山中雨後	・5	〃
底倉春雨	・5	〃
塔の沢	・5	〃
和平悲傷	45・6	『海の世界』（改題「長江孤客」）
午時	・6	〃
水鶏夕の楽	・6	〃（加筆改題「水鶏鼓」）
払暁	・6	〃（『洗心録』『洗心広録』収載）
暮春孟夏	大2・6	『新修養』（加筆改題「書斎の牡丹」）
無題	・6・2	日記（昭25・4『心』「釣二題」の一篇）
すがり	3	（俗謡、大3、歌澤家元四代目寅右衛門の依嘱）
浅き春の夕	4・4	『俳味』4月号
もやし独活	・4	〃
花	5・8	（俗謡雑誌『みなおもしろ』8月号、半井桃水節づけ「新曲歌澤」）
東京府立第七中学校校歌	11・4	（広田龍太郎作曲）
秋田県立横手高等女学校校歌	12	
前橋市桃井小学校校歌	13・3	（島崎亀太郎作曲）

詩の風（感想）　15・3・1　『日本詩人』
シとチ　昭19・8　『三田文学』
近似音　・11　〃
本具音　・11　〃
ン　・11　〃
韵　20・1　『文芸』
音の各論　・2　〃
〃　・3　〃
〃　・6　〃（5月号）
〃　・8　〃（6月号）
〃　・10　〃
音と言語（累音・対音・省音・添音・倒音・擬音）
・11　〃
『音幻論』（付「序」「声音を記する符」「言語と文字の間の溝」）
22・5　洗心書林
老少問答　24・1・1　『塔』（創刊号）（未発表物語長詩）
〈釣二題〉下町歩夜釣・無題　25・4・1　『心』

〈短詩七篇—未発表遺稿〉Anthozoa・空・夜・狂体・又・又・無題　6・1　『心』

ゆめ　26・1・20　『露伴全集』第十三巻（幸田家蔵）

達磨さん　〃

俚歌七種　〃（蝸牛会にて題を付す）

墨堤春秋　〃

祖先のかたみ　〃

以上を概観すると、詩作品は明治・大正期にわたっており、死後に発表された詩稿や『音幻論』を加えれば近代詩歌によせる露伴の関心は生涯つづいたと見てよい。「露団々の歌」「雪紛々の歌」「おふみ様を弔う」「宝の蔵」「うすらひの歌」「新浦島の歌」など、早くから自作の小説や少年少女むきの作中に詩をちりばめている。たとえば、おふみ様とは、小説「大詩人」（改題「独朱脣」「対髑髏」）の作中の女人を思わせる人物であり、小説家露伴は詩人露伴でもあったようである。ひとり詩作してみるだけでなく、長唄の一節の蒐集と按配と戯評、童謡・四行詩の募集および選評など、詩歌・音曲への目配りが広く、斡旋の労も惜しんでいない。たとえば童謡などは、露伴がどのような方法によって集めたものか、その事情をうかがい知ることはできないが、新聞『国会』の連絡網のほか、知人や書簡などを介したものと思われる。

「現存せる童謡」（明26・6・30、7・1『国会』）の場合をみよう。

われ聊か思ふところありて去冬より今春へかけ新古を問はず現存せる童謡を蒐集せしが、もとより勢力無

き一個人の資格を以てせしことなれば意を満たすに足るほどは蒐め得ざりしも、各地方より落手せしもの数百首に下らず。

として摘記と評を試みており、蒐集の範囲は次のとおりである。

子守歌　福井県・福岡県　童謡　飛騨高山・福島県
手鞠歌　岐阜県　子守歌　若狭
手鞠歌　若狭　童謡　岩代・陸奥
子守歌　豆州

長唄の一節を集めて、いろは順に配し戯評をほどこした次のような例もある。

戯評長唄文句　新撰いろはがるた（明33・4・10『読売新聞』）

四行詩については意欲的に推進し、みずからも作り門下生にも促したようである。[2] 明治三八年九月から三九年三月末にかけて『読売新聞』に採用された短詩の投稿者と採用数を次にかかげる。（全集第四十一巻「短詩評」）

斎藤紫影19　中谷無涯19　米光関月13　神谷鶴伴14　大野若三郎9
巽　木鶏8　漆山天童5　加藤東風4　佐藤露英4　村田琴伴3
公田杳々3　大島宝水3　堀内新泉2　水島巴箋2　天野会心2
久保田世音1　卜部観象1　倉本清1　籾山東州1　松岡夢鳥1
卯野木紫潮1　遅塚麗水1　筧流水1　物集梧水1

採用数の上位に門下生の名がみえるだけでなく、投稿者の範囲は全国から外地に及び、計七二人、八五篇、三

三地方（牛込・本郷・小石川がそれぞれ二回）にわたった。「戸山分院」とあるのは僧侶からの投稿であろうか。「在韓国」「於満州」「戦地」「旅順口」などが日露戦争後の応募範囲を物語っていよう。

甲斐　播磨　但馬　京都　牛込　小田原　小石川
長野　豊多摩　名古屋　戸山分院　埼玉　武州　美州
和歌山　下谷　在韓国　本郷　但馬　弘前　横浜
熊本　赤坂　於満州　戦地　旅順口　越後　京橋
久留米　牛込　小石川　桜島　駒込　本郷　神戸

採用句の出来映えと露伴の評、また露伴自身の詩についてはあとに譲ろう。彼が長篇連載小説『天うつ浪』を中断したという事情に、この投稿範囲がなにほどか関わっていたように思われる。日露戦争と兄郡司成忠のカムチャッカ侵攻につづく抑留や生死不明が、脂粉の気の濃い世界を書き継ぐことをひかえさせた。それが小説中断の理由だったとすれば、小説に替えて四行詩募集とその選評に専念した露伴の「心のあと」もまた、一度はこの見地から顧みなければならないだろう。

露伴はわが心懐を「心のあと」と呼んだ。（詩集『心のあと　出廬』「心之足止緒言」）

字を列ねて辞をなし、辞を累ねて文をなすもの、いづれか心より出でざらん。

（略）されど此は我が筆のすさびの種々のものの中の、ある一種のものにいと早くより負はしゝ名にて、此の名負はしゝ折には年齢若き心の一ト向なるまゝ、拙き名なりとも思ひ至らでありしなり。

小説・随筆・論議・考証・雑談の類でもない。心緒を節奏どってものしたものや戯歌の類を、しかし心若きま

ま「心のあと」と名づけてきた。庚辰（明25）のころから「老幼問答」などを詩嚢に累ねて十二年、今年は「いと恐しき戦起りて」世情もただならない。

我が心もた徒に我が身の上の私情にのみ関りて動きも沈みもせざるなれば、つたない心のあとを世に示そう。ただし語は俗でも「思ひをして邪ならざらしめん」ことを願っている、というものである。「我が身の上の私情」「動きも沈みもせざる」とは、実弟として、兄郡司が抑留されたあとの報効義会の始末に忙殺されていた事情に触れたものであろう。(3) しかし、そのことがなぜ「心のあと」を世に問い、四行詩を募ることにつながるのであろうか。日本近代詩の大勢と相渉るようでいながら相渉らず、相渉らないようでいながら結局は相渉ることになる露伴詩とその詩評の異様さは、多分にこのあたりの事情に兆していたように思われる。

露伴の詩論と詩の評とを顧みよう。小論の冒頭に引いた「音と詞」につぐ同じ二二年の論説に「請教放語」（『志がらみ草紙』第十二月号）がある。これを含む「風流問」全体が同年に成ったと推定されるものである。

（全集第四十巻「後記」）

支那西洋にては韻のあるなしにておほよそながら（必ずとは云はず）詩文の差別をも見得べき程にて、殊に支那にては是なくば詩とは云はざる程に大切なる韻の事に付き、我国人のさらに意を注がざる耳ならず、学匠詩宗と世にもてはやされて腹中に内外万巻の書を蓄へ筆頭に縦横千般の論を逞ふする人々にて、且つは新体の詩起こさゞるべからず古来の和歌は規模矮小にして詩歌本来の大任を尽すに足らずなんどと云はるゝ人まで、さらに韻の事に付き云ひ出られしを聞かざるこそ愈々あやしけれ。

露伴はみずから経営調査して五位三位俊成卿の無韻説と清輔朝臣の有韻説とを示し、有韻の歌まで試み、日本語で有韻の歌は困難、という結論を得ている。

予は試みに有韻の歌を作りて見たるに私に種々の説を得たり。蓋し日本の語法は西洋支那と大いに異なるより押韻の歌を作ること難きなり。

ここに言う有韻の歌の試みとは、「無題」（明22・8・7『読売新聞』）として、有韻論の露伴と無韻論の落花漂絮こと中西梅花との間で交わした試みにも知られよう。まさに明治二二年の試みであり、それらの調査と試作から次の視点を得たようである。

日本語は語序が単調――名詞のつぎに動詞が来て助字（助詞・助動詞）がつづく。

動詞の韻が意味一律――五十音図の横の段、エ段は命令、ウ段は現在（終止形）。

日本の詩歌を音と詞から見直そうとするこの視点を、露伴は歌人の井上通泰にたまたま問うたものらしい。通泰、すなわち柳田国男の長兄であり万葉研究で一家をなし、眼科医として知られ、森鷗外と交遊があり、のちに山県有朋の和歌を見た人である。

頃日井上通泰先生と紅葉館に初めて逢ふ。談たま〳〵和歌の韻の事に及ぶ。先生亦見る所あるべく思はる。然れども漫りに云はず。予まづ云ふ。

しかし露伴に得るところはなかったらしい。「風流問」後半の生前未発表の「第十六新体歌」に、つぶやきとも溜め息ともつかぬ、つぎのような言句が残されている。明治の新体詩歌は、露伴の見込みとは別様の途を歩みはじめたと見え、露伴の詩は結局、独自の「心のあと」をたどったもののようである。

明治以来世に新体詩と唱ふる者あれども、（略）一として詩といふべき廉なく、却て多は我国の句法に則り我国の手爾於葉に従ひ、恰も我国の長歌の俗語まじりのごとき者なれば、予は之を新体歌といふこそよけれと思ふなり。

三　新体の詩歌

明治二三年以後の露伴は詩論に黙していたが、明治二九年に『文学界』に書簡をよせ、新体詩について同誌および新体詩家の発奮をうながした。この書簡は、「左の一文は幸田君が編者に寄せたる書翰なり」と「まえがき」され、「新躰詩に付て」（明29・6月号『文学界』）と題して掲載された。

君の雑誌は売れざるを懼れざるが上に新進者の為に路をひらくをもつて任ぜらるゝ由豫て承り及び候が同じくは蓆旗にてもよし竹槍にてもよしせめて勇気ある詩家をたゝしめ玉はむことを敢てし玉はざるや願はくは天下に先つて新詩のために義を唱ふるの士を出されたく候外山博士井上博士等の新詩は仮令博士等張良の如しとするも博浪沙の一撃位の事にて此後黄石公の教にても受け刻苦鍛錬されし上ならでは天下の大勢を動かしは得まじく心細き事に候

多少は公表されることを覚悟していたのかも知れない。しかし、「売れざるを懼れざる」とは私的な書簡に許された表現であり、蓆旗や竹槍のたとえには民衆蜂起の気概がうかがわれる。それが機縁となったのであろうか、この号から同誌に新体詩の掲載がふえた感じであり、九月号からは、この月仙台に移った島崎藤村の詩が目立ってくる。詩集『若菜集』に収められた詩群にほかならない。この時の書簡は、のちに露伴みずから、

「某に与へて新体詩の応に起るべく且つ須らく起すべきを説くの書」

という長大な表題を与え直して随筆集『讕言』（明34・9・18、春陽堂）に収めている。露伴本人にとっても大事な文章であったのだろう。北村透谷（明27・5没）以後の『文学界』を励ましたのかも知れない。

露伴自身は、長篇小説『風流微塵蔵』（『国会』明26・2・16～明28・4・5）の各篇の連載や中断があり、その間に兄郡司の北千島屯田、腸チフス、千葉県横田村への閉居、結婚などのことがあった。前年の明治二八年に新聞『国会』が廃刊し、論壇と文壇の雲行きが変わったことにも注意したい。[4] 露伴は迎えられて博文館の第二期『新小説』の編集者となり、新人の作を登用することを標榜し七月二七日の創刊をひかえていたが、その博文館は前年の明治二八年一月一五日に総合雑誌『太陽』を創刊しており、同じ日に帝国大学文科大学の有志が『帝国文学』を創刊、その十日前の一月五日には『早稲田文学』（第一期）が改巻第一号を出して第二期を迎えるなど、日清戦争の高揚した気分がこの年に持ち越された。折から外山正一の新作と提唱が新体詩界をさわがし、近代詩史にいう形想論争[5]がきざしている。すなわち『帝国文学』『太陽』に拠る高山樗牛と『早稲田文学』の島村抱月との応酬であり、そのかたわらで井上哲次郎の膨大きわまる「比沼山の歌」が延々と各誌に披露されている。一方で上田敏の「細心精緻」な学風[6]が姿をみせ、S.S.S.「於母影」の森鷗外も戦陣からもどって『めさまし草』（明29・1～）に拠る。そんな時期の書簡である。

第二期『新小説』「時報」（明29・8月号～明30・6月号）欄は無署名ながら、雑誌の総体が露伴の責任編集である。新人の新作をもって編集するという力技に堪えて一年間、努めたと言ってよいだろう。こちらは書簡と違って「時報」欄らしく、広く各雑誌と新聞に目配りをきかせ、『帝国文学』『めさまし草』『世界之日本』『早稲田文

学』『国民之友』『太陽』『明治評論』『日本人』『国民新聞』に触れており、露伴の立場がおのずからにうかがわれるものである。

但し四五年前の如く訳も無く新躰詩を攻撃する声の聞えずなりたるは、確かに新躰詩の漸く世に容れられ来りしなるべし。（新躰詩）

帝国文学の新躰詩論は巽軒先生の事とて、坂田の金平が演説壇に立たばかくもあらんかと思はるゝやうなる威張り方なれど、威張り得て気味よし。論意も古しと云はば云ふべけれど、甚だしき保守党のほかは強て咎むるもの無かるべし。（評論の声）

新しき詩の出づべきは何時なるべき。（略）散文のみ書きたる人の新詩つくらんとするも見え、短歌俳句のみつくりたる人の新詩に指を染むるも見ゆ。出でんかな新しき詩、起らんかな明治の歌。（新詩）

しかし、露伴は新人採用の力技に疲れたようである。いや、もっと長く厳しい道程を生涯の前途に見据えたかのようである。「文人の自ら保つべき態度」（明29・9月号『新小説』「讕言長語」）に「敢て苦吟せんかな」という文が見える。また、「よしなしごと」（『新小説』明29・11臨時増刊号）に「明治五十年観」という次のような文章が見える。

汝、露伴、百年の後は暫く擱き、褒せられたらんには明治五十年を想像すべし、貶せられたらんにも明治五十年を想像すべし、腹立つことあらば明治五十年を想像すべし、争ふことあらば明治五十年を想像すべし、何事も二十年後に委ねよ。（略）これらの想像精細にして、明治五十年の文界と自己とを明らかに思ひ浮ぶるを得ば、俄然として、今の汝が為せるところの事の如何なる価を有せることなりやを悟るに於

て思ひ半に過ぐるものあるべし。（略）

以上は我が最も親しめる人にて如何なる場合にも我に同情を表しくるゝ我が第一の友の我に告げたるところなりし。

ここに言う「我が第一の我が友」とは、妻の喜美子であろうか。それとも虚構をふくむものであろうか。新体詩界の現状と食い違う「心のあと」の在りようは、露伴自身おおいようもなかったようである。詩壇は、外山の軍歌と朗読法をもて扱いかね、樗牛の励声[7]と抱月の美辞学[8]とのあいだで右往左往していたようなものであり、樗牛が去ったあと、口語の散文詩が登場して皮肉にも抱月の thout meter（詩想律）まで押し流した観がある。

しかし、さしあたりは外山正一博士の軍歌朗読である。

『新体詩歌集』序（外山正一・中邨秋香・上田萬年・阪正臣共著、明28・9、大日本　図書株式会社）

「新体詩及び朗読法」（明29・3〜4『帝国文学』第二巻第三・第四）

詩壇に物議をかもした『新体詩歌集』の「序」を引こう。

抑も本邦に於ける今の軍歌の嚆矢は十四年前に予の作りし『抜刀隊』の歌にして、又本邦に於ける第二の軍歌は其の後久しからずして是も予の作りし『来たれや来たれ』の歌なりしなり。（略）数年前より又一種の新体詩を試作することを勉めたり。

わが国の新体詩の夜明けが明治一五年『新体詩抄　初編』にあることは、その前史と周辺の律文・ソング[9]とを視野に入れるかぎり、ひとまず容認できよう[10]。ただし、外山にあってはポエトリーとソングとが混在している。明治一八年（一八八五）鹿鳴館の音楽会で披露された軍楽教師シャルル・ルルー Charles Leloux の作曲があん

がい「抜刀隊の歌」を流行らせていたのかも知れない。加えて軍歌の嚆矢が「抜刀隊」にあったという自負も、今日では否定されよう。私学校党、西郷側の幹部某の「出陣のいろは歌」（明9・8・24『東京日々新聞』）が紹介されている。[11] それらを措いても、明治二九年当時として外山に「二つの創見」――散文詩と自由詩の試みが含まれていたとする見解がある。[12] だが、自由詩や口語詩から振り返った結果論の気味があり、異議もある。すなわち、詩におけるテーマとイメージとを対比し、前者に「明治人の緊張感」を見てとり、後者に「ハアトの事」を認めようとする立場である。[13] 前者の思想的な系譜に、

〉山らの官僚的ミリタリズムを基調とするもの

（山田美妙、国文学の封建イデオローグの一群、『帝国文学』による新進グループ、壮士的ミリタリズムとでも言うべき与謝野鉄幹ら別の基調音）

および、

与謝野晶子・大塚楠緒子ら、生理的実感を前者と対立させた〈近代詩〉的な陰影

とをあげ、これらに対置される後者のイメージが「蝶々のイメージ」であるとして、愛知県師範学校教員の野村秋足が明治七年に伊沢修二に依頼されてつくった「蝶々」（明14・11『小学唱歌集・初編』）をあげる見方である。軍歌をも含めたソングの見直しを申し立てるものであり、近代詩歌、さかのぼって日本の伝統的詩歌が見失った音楽性に注意をうながし、たとえば次のようにいう――。

〈唱歌〉の詩人、野村秋足がとらえた輝かしい明治初頭の、若々しい蝶々のイメージは、たちまち透谷において〈秋の無情〉の風をうけ、この詩人とともに散っていかねばならなかった。

いかがであろうか。なお考えたい。ただしここで私見をはさめば、伝統的な詩歌はあくまでも詠むものとされ、謡う歌謡、語る歌謡は音曲として低く見られてきた。その盲点を衝いたのが朗誦に堪える海外詩の韻律であり西洋音楽であったということであろう。これは東西の音感がまともに衝突した文明の劇であり、[14] この時、律文や朗読をも含めた〈近代詩歌〉の在りようが問われていたようである。露伴は、こと新体詩歌に関するかぎり、「明治人の緊張感」とテーマにほとんど興味を示さなかった。彼の詩歌はなによりも「心のあと」であり、「音と詞」であった。「請教放語」（明22・9）以来、外山の朗読法に屈託した理由もそこにあったろう。露伴はたしかに読む人、読書の人ではあろうが、表現においては耳の人でもあった。電信技手として二年余の実務を経験している。「音と詞」（明22・1～2）の当時、妹の延が文部省音楽取調掛（現東京芸術大学音楽学部）第一回卒業生となり、わが国最初の留学生として横浜港からボストンに旅立ったことを思い合わせていいだろう。延がウィーン留学から帰国して東京音楽学校の教授となったのは、露伴がふたたび近代詩歌に発言する半年まえ、明治二九年一一月のことである。

四　風流悟―魔王

露伴の心懐を「心のあと」とした場合、それは総体としてどのようなものであったろうか。文壇登場のはじめから風流の気味を帯びていたと思われる。登場作『露団々』[15] の場合を見よう。作中の詩人タイラックが、たとえば第十六回で次のような詩を書き残して去る。

可憐の少女は麗はしき天上の三日月をとりて髪を餝るの櫛となさんと欲すれども、風流の韻士は誰か

園中の薔薇を折て瓶に挿むの花となすを願はんや。

作中でわずかに見える「風流」であり、富豪が公募する花婿選考の大詰めにきて候補者二人のうちタイラックが身を引く。詩人の出処進退を印象づける「風流」であろうが、彼が愉快・不愉快という課題に応じてつづったとされる長編詩は生ぬるい代物ではない。相愛の夫を外敵のために失った淑女が夫を恋いつつ雪の積丹に盲いて凍え死ぬ[16]という、およそ風流にも花婿にもそぐわない惨劇である。これがなぜ愉快であり風流であるのか。詩人は追記する。真っ白な雪の美徳にとって不愉快は黒い兎として感じられようが、この黒きものによってこそ雪の白さは徳を厚くし黒き兎もついに白く化せられるであろう、という。この長編詩を、詩人は「蚯蚓の吟」「鸚鵡石」とへりくだり、小説の舞台から立ち去る。

文壇登場のそもそもから、露伴の風流は愉快・不愉快を抱え込み、破鏡の惨劇をはらみ、みみずのような地虫の吟であることを隠していない。

花嫁候補に残ったもう一人の、吟蜩子なる「風流の閑蒿人」を見よう。「蚯蚓の吟」に対して、これは蜩の吟であり、田亢龍なる増長慢の替え玉候補を強いられた日本人である。しかし、張本人の亢龍にしても『説文』[17]では鱗虫の長とされており、田を這いまわる地虫の一族に違いない。高くのぼりつめた龍という至尊の名をつけてあるが、『易』の乾「文言」伝は亢龍悔いありと言う。さきの愉快・不愉快、白・黒などに照らして、作者露伴は天上と地類とを懸け離れたものとは見ていなかったようである。

中西梅花（落花漂絮）と交わした脚韻詩「述懐」を引こう。梅花は五十音図のア・エの韻を与えられ、露伴はイ・オを与えられて韻を交互に踏んでいる。そうした制約がありながら、露伴は風流・蝸牛などを繰り出してい

る。

銭はあらずも　身は風流の、
　一味の閑に　世を過ごしてよ。

ちりゆく花に　雨も恨みず、
はかなき月に　雲を啣つも
くちに荘子が十万の法螺、
はらに門左が百千の綺語。
竹の葉末に　ねぶる蝸牛は、
　ひそかに笑ふ　屈原のやぼ。

また、「世を白露の　伴と思はば、」と梅花に挑まれ、

蝸牛の殻に　角をまるめつ、
風吹野辺に　安く寝んかも。

と次韻している。これが「突貫紀行」[18]にいう野宿と雅号の由来[19]とを寓していることは明らかであり、露伴という雅号はほとんど蝸牛に近いものがある。

「おふみ様を弔ふ」の場合は、本体の小説「縁外縁」そのものがもとの「題詩人」から割れ、題名を「対髑髏」↓ふたたび「縁外縁」↓ふたたび「対髑髏」、さらに「毒朱脣」とあわせて総題を「大詩人」に改めるなど曰くつきの主題をふくんでおり、夕霧・糠雨・雲・霞・野分・霜・瀬・流・沢・水・涙などが「吾袖の露」に結ば

れて、ここでも空を飛ぶ蝶と地をはう虫螻や蝸牛とが髑髏に配される。

徳富蘇峰に示したことがあるという「老少問答」[20]にあっては、其九でようやく風流とかかわって芭蕉・西行や富士があらわれる。かつ、新体の歌が口にされるが、それも茶店の老婆に揶揄される底のものであり、みずから悲壮がるところがない。

つくづくと　我を見て婆は、
何故の　御旅行ぞと問ふ。
風流の　修行だと答ふ。
芭蕉とやらの　真似さつしやるか。いゝや
西行なぞの　真似ではないか。いゝや。
ホ、業平の　真似でもあるまい。

など、やりとりのあげくに若者が答えるあたり露伴の詩は物語めくが、小説と違って飄逸な趣が伴うのは、なぜであろうか。

箇程をかしき　世の中に
建立すべき　新体の
歌に心を　ゆだぬるが、
即ち我身の　修行なり。

露伴の風流は、悲壮にせよ飄逸にせよ、そもそもの初めから地虫を離れなかったと見てよいだろう。

にもかかわらず「井上通泰子よ」（明23・8月号『志がらみ草紙』）という昂然たる公開文がある。あの「請教放語」の主題は決着を見なかったとおぼしく、身を地上の虫と見据えたところから論を起こし、冒頭にいう――。

者あり。其大きさは足下が手中の酒盞をもつて掩ふに足り、其形は醜にして見るに堪へず、其声は微々として一断一続まことにかすかなり。（略）足下嘗て彼小禽微虫にも耳を仮せり、今姑く露伴に聴け。夫れ詩形は金剛不壊のものならずといへども詩想は必ず常住不壊のものならむ。

詩想は不壊、詩形は不定。独特の形想論をひっさげ、一転して露伴は眉をあげ、揚言する。

詩形の為に肝胆を砕くの痴は、肉体の為に金石を煉りし古帝王の痴と相去る幾何ぞや。

形なるものは、かならず時をまって成就する。だから無常なることをまぬかれない。すでに自分は梅花道人に語ってこう言った、「詩をなすの第一階は詩形の奴とならざるにあり」、

既に詩形の奴たらず何の閑あつてか師友の賛辞、美人の賞詞、砂の如き金帛、鹿の背の斑紋の如き勲章、無常の名誉の奴たらむや、夫れ如是にして初めて微力の腕も大自在に揮ひ得べく、

要するに、詩をなすものは「能く詩を愛するの大丈夫たらざるべからず」――。これをさきの揚言――、夢幻の詩形に労苦する詩人の痴は古帝王の痴と「相去る幾何ぞや」に照らせば、空の空なる詩形に相渉る男子一生の気概がうかがわれよう。しかもそれは地を這う虫の気概であって、樗牛などの呼号する揮発性の強い詩想論ではありえない。前途に途方もない艱難が予感される詩形論であり、風流観としてもかなり特殊なものであろう。

（略）唯最後に予は懺悔す。予の今尚好詩人たり得ずして風塵に労碌するの痴物たるが故に、或は足下が

予の言を聞(きい)て軽んずることあらむを恐るゝことを。然り、然れども、足下何ぞきりぎりすの形をもつて其声を議するの人ならむ耶。予また何を恐れて我口を噤まむ。

明治二九年に『文学界』編集子に寄せた書簡「新躰詩に付て」がこの独特な詩形論の延長にあったとみて誤りなかろう。書簡には、こうあった。

新躰詩は猶飛べぬ禽の地にあるすがたなりと見候はんもあやまちはあらじよし飛ぶとも蜻蛉の飛ぶ蝶の飛ぶ蚊の飛ぶなどさまで羨まむは陋しかるべし天に響く声してなきつゝ鶴の飛び日の光り掩ふほどの翼ひろげて鵬金翅鳥の飛ぶ飛びかたこそ羨まば羨むべきなれ

北村透谷と樋口一葉亡きあとの『文学界』にあえて露伴が期待したもの、および、改題して随筆集『讕言』に収め全集に収めたその本意が見えてくるのではあるまいか。

すでに透谷の風流観については、透谷研究の側面から新資料の発見[21]をはじめ諸家の論がある。それらを露伴の風流に即して顧みれば、両人の次の諸作に注意が向くのである。[22]

露伴　一碗の茶を忍月居士に侑む
（明23・4・30『読売新聞』）

露伴　風流悟
（明24・8・13『国民之友』第百二十七号付録「藻塩草」、雷音洞主）

露伴　虚子が言について
（明24・8・19～20～21『読売新聞』、雷音洞主）

透谷　透谷子漫録摘記

（明23・2・22）
〃　（明23・3・9）
〃　（明23・3・12）

露伴　「虚子が言について」について
（明24・8・29『読売新聞』、雷音洞主）

露伴　新葉末集　（明24・10・21　春陽堂）

露伴　五重塔　（明24・11・7『国会』、其一〜）

露伴　すきなこと　（明24・12・7『後の月影』所収、春陽堂）

透谷　厭世詩家と女性
（明25・2・6「上」『女学雑誌』甲の巻、第三〇三号、2・20「下」第三〇五号）

透谷　伽羅枕及び新葉末集（其一）
（明25・3・12『女学雑誌』甲の巻、第三〇八号）

露伴　五重塔　（明25・3・18『国会』、〜其三十一〈現、其三十二〉）

透谷　伽羅枕及び新葉末集（其二）
（明25・3・9『女学雑誌』甲の巻、第三〇九号）

露伴　五重塔余意　（明25・4・12『国会』其一〈現、其三十三〉）
（明25・4・17『国会』〜其二〈現、其三十四〉）

（明25・4・19『国会』～其三〈現、其三十五〉）

透谷　松島に於て芭蕉翁を読む

（明25・4・23『女学雑誌』甲の巻、第三一四号）

透谷　後の月影

（明25・4・23『女学雑誌』甲の巻、第三一四号）

透谷　我牢獄

（明25・6・4『女学雑誌』甲の巻、第三一〇号）

透谷　透谷子漫録摘記

（明25・8・30）

透谷　尾花集（露伴子著）

（明26・1・14『女学雑誌』甲の巻、第三三六号）

透谷　風流

（明25・12・1『青年文学・鳳雛』、明25・4～5月執筆か）

露伴（雷音洞主）の「一碗の茶を忍月居士に侑む」は、芭蕉・西行、特に禅僧の売茶翁（一六七四～一七六二）の風流を引いて石橋忍月に酬いた論であり、その中に「般若心経第二義諦」[23]の文字が見え、「居士知るや古人句あり、風流の初や奥の田植歌と。我はいまだ能く蕉翁が風流の用心を知らねど、」という一節がある。透谷の「松島に於て芭蕉翁を読む」に先立つこと二年、いわゆる心的動揺を物語る文章である。つづく雷音洞主「風流悟」を引こう。

恋と名のついたるものは即ち牢獄なるか。（略）我はむしろ我が正一位たり公爵たり、地球上最も貴き家の子孫たり、絶倫の美男子たり、無類の話し上手たり、金襴緞子につゝまるゝ人たり、家に千萬金を

積むの財産家たらむことを願ふよりは、却て彼女が我と同じく夢の化石世界に於ける劣等者にてあらむことを冀ふものなり。（略）然しながら彼女は病に罹りし、我は常に其癒えんことを祈りし甲斐なく彼女は今は亡し。然れども彼女は最期に於て我が恋に感じたりし、我が頭上に極めて深き愛情の籠りたる眼の光りを澆ぎたりし。我は見ざる語らざる恨まざる、而して長く忘れざる恋をなしたり、世人が見て成らずとなせるところの恋をなしたり。今も尚ほ恋の牢獄の裏にあつて生活せり。此牢獄と名のついたるものは即ち常に、今も存せる彼女と我とが手を携へて逍遥するところの楽園なり。牢獄は即ち楽園なり、蛇の居らざる楽園なり。

一読して『露団々』におけるルビナーシンジアの純愛や『風流仏』（明22・9・23、新著百種5、吉岡書籍店）の仏師朱運の境涯が連想される。しかし、文壇登場作『露団々』があらかじめ封じておいた「凶悪勇奸妖怪佞毒」や「戦争自殺淫猥偸盗」（『露団々』例言）をこの「風流悟」がひそめていたことは、高浜虚子の「風流悟」評にかみついた雷音洞主「虚子が言について」につけば明らかであろう。ひたすら嘲罵・諷刺・悪態。いわゆる東洋風江戸っ子風の花鳥風月[24]のよすがもない。「虚子が言について」について」に至ってはただただ険しく、題名をも含めてくどくどしく、毒念を封じ込めようとして封じかねた文であり、生前の単行本にも全集にも収められなかったものである。その「風流悟」が透谷の「我牢獄」の主題へと展開したことは、先後や優劣の問題ではあるまい。透谷自身が後記して「旧作」と言い「今日の余の思想とは異なるところ」と断っている。露伴にわずか一年四ヶ月劣る二五歳五ヶ月の生涯を疾走して去った、その烈しい振幅にこそ透谷の悲しみと天才が認められなければならないだろう。透谷は「我牢獄」に書き付けた――。

雷音洞主の風流は恋愛を以て牢獄を造り、己れ是に入りて然る後に是を出たり、然れども我が無風流は牢獄の中に捕繋せられて然る後に恋愛の為に苦しむ、我が牢獄は我を殺す為に設けられたり、我も亦た我牢獄にありて死することを憂ひとはせざれども我をして死す能はざらしむることもせず、空しく我をして彼のデンマルクの狂公子の如く、我母が我を生まざりしならばと打ち嘲たしむるのみ。

透谷が露伴の「すきなこと」に「随喜」して書評「後の月影」を書き「風流」を残したことについては今日、報告と考証[25]がある。ただし逆に露伴が透谷の文章に激発させられることがなかったろうかという疑いが残る。激発させられることがあったと考えたい。「五重塔」の場合がそれである。小説は塔の竣工という大尾を前にして作中に嵐をはらみ、ほとんど一ヶ月連載を中断した。透谷「伽羅枕及び新葉末集」、とりわけ「其二」の直後であったことに注意したい。透谷の征矢は露伴の肺腑を衝いた――、そのことを認めたいとする誘惑を禁じがたいのである。連載が再開してたちまち、飛天夜叉王の嘲罵と咆哮は無明の長夜を疾駆した。露伴の小説は一瞬、魔王蹶起[26]する劇詩の天宮を翔けあがり、三回で終息した。

注（1）『心のあと　出廬』（明37・12・29印刷、明38・1・1発行、12・26三版発行、春陽堂）
『露伴全集』第十三巻（昭26・1・20第一刷、昭53・11・17第二刷、岩波書店）
（2）斎藤越郎『増補　蝸牛庵覚え書き――露伴翁座談抄――』（'94・11・10、けやき書房）
朝倉治彦「露伴の短詩提唱」（'79・8・17『露伴全集　附録』「昭二十四年版　露伴全集　月報」）
（3）塩谷賛『幸田露伴　上』（昭40・7・30、中央公論社）「「天うつ浪」」四二四～四二九ページ参照。
（4）柳田泉『幸田露伴』「二八　この期の露伴　1　廿六年――郡司大尉　2　廿七年――露伴病む」（昭17・2・12、

中央公論社）
(5) 三浦仁編『日本近代詩作品年表　明治篇』（昭59・2・25、秋山書店）
角田敏郎『研究と鑑賞　日本近代詩』（'89・10・10、和泉書院）
(6) 安田保雄『上田敏研究――その生涯と業績――』（昭44・10・10、有精堂）
(7) 林斧太「我邦将来の詩形と外山博士新体詩」（明28・10『帝国文学』第二巻第十）
(8) 島村滝太郎「新体詩の形について」（明28・11・10～25『早稲田文学』）
島村滝太郎『新美辞学』（明35・5・31、早稲田大学出版部）
島村抱月「現代の詩」（明40・11『詩人』、談話）
(9) 関良一『近代詩の成立と形態』（昭51・6・15、研究選書15、教育出版センター）
(10) 三好行雄『詩歌の近代　三好行雄著作集　第七巻』（'93・9・20、筑摩書房）
(11) 赤塚行雄『「新体詩」前後―明治の詩歌』（'91・8・28、学芸書林）
(12) 日夏耿之介『改訂増補　明治大正詩史　巻ノ上』（昭23・12・20、東京創元社）
注（11）赤塚行雄『「新体詩」前後―明治の詩歌』（'91・8・28、学芸書林）
(13) 野山嘉正『日本近代詩歌史』（'85・11・25、東京大学出版会）
(14) 樋口覚『三弦の誘惑　近代日本精神史覚え書』（'96・12・14、人文書院）
園部三郎『日本民謡歌謡史考』（'80・8・20、朝日選書）
古茂田信男・古田芳文・矢沢寛・横沢千秋編『新版　日本流行歌史　上』（'94・9・30、社会思想社）
古茂田信男・古田芳文・矢沢寛・横沢千秋編『新版　日本流行歌史　中』（'95・1・30、社会思想社）
小泉文夫『日本伝統音楽の研究　1　〈民謡研究の方法と音階の基本構造〉』（'84・8・20、音楽之友社）
小泉文夫『日本伝統音楽の研究　2　リズム』（小島美子・小柴はるみ編、'84・8・20、音楽之友社）
小泉文夫『日本の音　世界のなかの日本音楽』（'94・9・15、平凡社ライブラリー）
小泉文夫『歌謡曲の構造』（'84・5・1、冬樹社）

笠原潔『音楽の歴史と音楽観　放送大学教材』（'92・3・20、財団法人放送大学教育振興会）
安田寛『唱歌と十字架　明治音楽事始め』（'93・6・10、音楽之友社）
泉健『音階と日本人―和歌山県のわらべうた研究―』（平7・3・15、柳原書店）
山口剛『風流仏　明治文学名著全集第貳篇』「解説」（大15・9・10、東京堂）
柳田泉『随筆明治文学　下』（昭13、春秋社）「露伴研究（未定稿）」（『日本文学講座』第一五巻・第一六巻、昭3・3～4、新潮社）

(15) 注（2）柳田泉『幸田露伴』（昭17・2・12、中央公論社）
二瓶愛蔵『若き日の露伴』（昭53・10・25、明善堂書店）
潟沼誠二『幸田露伴研究序説―初期作品を解読する―』（平元・3・30、桜楓社）

(16) 「雪紛々」（明22・11・25～12・25『読売新聞』）
『露伴全集』第七巻「後記」（昭25、蝸牛会編纂、岩波書店）

(17) 〔漢〕許慎撰〔清〕段玉裁注『説文解字注』（一九八八・一〇、上海古籍出版社）十一下第二段。白川静『字通』（'96・10・14、平凡社）に「卜文・金文の字形は、蛇身の獣の象形。」とある。

(18) 『枕頭山水』（明26・9・19、博文館）

(19) 「縁外縁」（明23・1・18「縁外縁」『日本之文華』、明23・6・17「対髑髏」『葉末集』、明36・6「縁外縁」『太陽』博文館創業十周年記念臨時増刊）

(20) 「心のあと　出廬」「はしがき」（明37・3・13『読売新聞』）

(21) 小田切秀雄編『北村透谷集　明治文学全集29』（昭51・10・30、筑摩書房）
勝本清一郎編纂・校訂・解題『透谷全集　第一巻』（昭25・7・15、岩波書店）・『透谷全集　第二巻』（昭25・10・30、岩波書店）・『透谷全集　第三巻』（昭30・9・10、岩波書店）
色川大吉『新編明治精神史』（昭48・10・25、中央公論社）
小澤勝美「事実と虚構―「富士山遊びの記臆」2」『北村透谷　原像と水脈』（'82・5・15、勁草書房）

川崎司「透谷年譜」『透谷と近代日本』（北村透谷研究会／桶谷秀昭・平岡敏夫・佐藤泰正、'94・5・16、翰林書房）
笹淵友一『北村透谷』（昭25・7・20、福村書店）
坂本浩『北村透谷－自由と平和、愛と死－』（昭32・8・20、至文堂）
笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』（昭33・1・10、明治書院）
笹淵友一『「文学界」とその時代　上』（昭34・4、明治書院）
安住誠悦『浪漫主義文学』昭44・1、北書房）
平岡敏夫『北村透谷研究』（昭42・6・30、有精堂選書4、有精堂）
平岡敏夫『続北村透谷研究』（昭46・7・20、有精堂選書22、有精堂）
佐藤泰正「北村透谷集解説――近代文学の源流たることの意味」『近代日本文学大系　第9巻　北村透谷・徳富蘆花集』（昭45・8・25、角川書店）
佐藤善也「北村透谷集注釈」『近代日本文学大系　第9巻　北村透谷・徳富蘆花集』（昭45・8・25、角川書店）
日本文学研究資料刊行会『北村透谷　日本文学研究資料叢書』（昭47・1・1、有精堂）
東郷克美「解説」『北村透谷　日本文学研究資料叢書』（昭47・1・1、有精堂）
藪禎子『透谷・藤村・一葉』（'91・7・10、明治書院）
平岡敏夫『北村透谷研究　第四』（'93・4・9、有精堂）
色川大吉『北村透谷』（'94・4・25、東京大学出版会）

(22)

槙林滉二「北村透谷と幸田露伴－北村透谷における虚と実・序－」（昭51・3・1、『文教国文学』4）
本間久雄「露伴と「文学界」」（昭24・12、「露伴全集月報」第七号、岩波書店）
注（21）色川大吉『新編明治精神史』（昭48・10・25、中央公論社）第一部　4「六　農民騒援と透谷－社会革命的終末観の源流」
小澤勝美「透谷と秋山国三郎－龍子句集「安久多草紙」の刊行によせて－」（'74・3・1、『5』（ふあいぶ）5）

(23) 「般若心経第二義注」(『露伴全集』第四十巻、明23・8・20と推定、斎藤八郎(紫影)筆写)

(24) 勝本清一郎「「風流」解題」『透谷全集　第二巻』(勝本清一郎編纂・校訂・解題、昭25・10・30、岩波書店)

(25) 注(21)小澤勝美『北村透谷　原像と水脈』('82・5・15、勁草書房)

注(21)堀内功夫「透谷『風流』――執筆年月」(『池坊短期大学紀要』第一〇号、昭55・3)

明治二五年五月一五日『文学雑誌・葦分船』(第二次)第壱号(薫心社刊)に同年同月二〇日刊『文学雑誌・あずまにしき』第壱号の広告が掲載の由。

平岡敏夫「『富士山遊びの記憶』と『甲相紀行』」(『稿本近代文学　特集・北村透谷』第一集、昭53・9)

(26) 注(2)柳田泉『幸田露伴』(昭17・2・16、中央公論社)

(一九九七・一・一六)